異世界でＶＲＭＭＯチートハーレム

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でＶＲＭＭＯチートハーレム

【Ｎコード】

Ｎ１５７０Ｙ

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

ＶＲＭＭＯをしている最中に死亡した主人公。美少年の主人公は、裸で旅をすることになる。七人の美しい年頃の娘は奴隷になるのか！　チートで、ハーレムな、異世界ファンタジー。中世ヨーロッパ風な旅商人と占星術師は何者なのか？　とにかく、強い主人公が敵をやっつけまくるご機嫌極楽道中。チラリにポロで時々、危険。もちろん、モロもあるよ。

1、異世界で目が覚めた（前書き）

わたしの過去の連載を知っている人にはたいへん失礼ですが、これは完結することをまったく目指さない超適当不定期連載です。毎日、必ず連載されるということはまったくありません。

1、異世界で目が覚めた

＜ＶＩＣＴＯＲＹ　ＲＥＭＥＮＢＥＲ　ＭＡＩＮ　ＭＥＭＯＲＹ　ＯＮＬＩＮ＞
勝利は、中心記憶回路を覚えている。
略して、ＶＲＭＭＯである。

ぼくの名前は、チート・ハーレム。
強くも賢くもない平凡な一市民である。
場所は、異世界。
中世ヨーロッパ風といえば、わかりやすいだろうか。
行商人の父と、占星術師の母の間に生まれた十四歳の男である。
行商人の父は、オーストリリアで時計や靴を買い、フラランスに運び売っている。ぼくはその手伝いをしている。
我がハーレム家は、一男一女の純愛を推奨する健全な家風である。ハーレムなどという姓をもっているため、誤解を生むことがあるが、決して、大勢の女性をはべらかせて乱痴気騒ぎをする一族ではない。

ＶＲＭＭＯとは、ぼくがヴァヴァチカンに行った時に、空中に砂で描かれた文字である。＜勝利は、中心記憶回路を覚えている。＞
いったい、どういう意味だろうか。
ぼくにはわからず、その神秘体験を見ていた。空中に砂が文字を描く。そんなことが起こりえるだろうか。しかし、現に起こったのであり、ぼくは、ＶＲＭＭＯという単語をしっかりと頭に叩き込み、きっとこれは母が行う占星術に関わる天の啓示か何かだろうと思い、砂を手にとろうとして、手を前に突き出したところで、文字を描いていた砂がさらりとこぼれ落ちた。

2、ギルドに登録しよう（前書き）

やっぱり、王道を書いていこうと思うんです。

2、ギルドに登録しよう

ぼくは行商人の手伝いをしてひらすら働いた。学校というものに通っていないため、知識は父と母が教えてくれるいかがわしいものばかりだ。

仕事柄、算数と読み書きはできるが、それ以外はさっぱりである。

我が家の大切な財産である一頭のロバに積荷を背負わせ、オーストリリアからフラランスに向けてひたすら歩く。積荷である時計や靴が荷崩れする時は、家族で総がかりで荷の整理をする。

運が悪ければ、全部の荷をバラして、一から積みなおさなければならない。

「我が家の蓄財は、残りわずかしかない。これで、荷が売れなければ、一家のたれ死にもありえる」

と、父はいう。

ぼくらは、長い道のりをひたすら歩いた。歩いて歩いて、歩き倒した。父の足が、歳をとっているため、脱臼している。脱臼したままの父を連れて、ぼくらは長く険しい道を歩きつづけた。道は整備されておらず、ところどころ、ロバが通れないため、長い迂回をしなければならないこともあった。

旅先で日が暮れれば、松明を灯し、毎日、行商に励む。遊んでいる時間はいっさいない。

「本場、皇帝の城下町の職人の品だよ。今なら、三割引き。買うなら今のうち。さあ、時計と靴の大売り出しだよ。いらっしゃい。いらっしゃい。本場、宮廷職人の作った時計と靴だよ。買うなら早いもの勝ち。今なら三割引き」

腹から声を出して、ぼくは呼び込みをする。

通りすがる人々は、時計や靴を珍しそうに手にとってみるけど、買ってくれることはめったにない。

本当は三割引きなんてしてないし、今日限りの大安売りというわ

けでもない。

「今日は、靴が一個売れただけだな」

父がいう。

「このままでは、一家はのたれ死ぬかもしれないね。チート、もしかしたら、おまえを丁稚に出すかもしれない」

丁稚になったら、師匠や兄弟子の命令を絶対に聞かなければならず、今より苦しくつらい毎日をすごすことになるだろう。ご飯だって、満足にもらえるかわからない。すべては師匠の命令通りに暮らすことになる。

ぼくは十四歳になるけれど、見かけるのは疲れた労働者ばかり。

「父さん、ぼくは、丁稚には行かないよ。猟師になろうと思うんだ」

「猟に使う銃や猟犬はどうやって買うつもりだ。くだらない夢を見ているんじゃない」

父さんは厳しくぼくを叱った。

3、C級クエストに挑戦だ

それから、行商の旅はつづいた。フラランスの王都まで旅をする。華の都パパリについたら、きっと、少しは商品も売れるだろう。それだけを希望に、つらい旅をつづける。

歩く。歩く。荷が崩れる。荷を組みなおす。

また、歩く。歩く。

役人が関所を作っていて、通行料を要求する。

「困ったぞ。こんな高い通行料は払えない」

頭を悩ました父は、役人に、なんとかもっと安く通してくれないか頼みに行ったが、

「おまえの妻を娼婦にでもしろ。顔も醜いばばあだが、ついてるものがついてればそれなりに売れるだろう。通行料を払えないものは通すわけにはいかん。無断で通った者は死刑にする」

と役人が行っている。

ぼくが噂で聞いた話では、国王はこんなところに関所をつくることを認めておらず、この領地を治める男爵が、新しい妾の屋敷を建てるためにお金が必要になり、通行料をとりたてるという重税を課すことに決めたらしい。

ぼくらに抵抗する方法はない。

ここを通れなければ、華の都パパリにはつけない。

父は、

「わたしたちの持っている最高級の時計を献上します。どうか、これで通してください」

と交渉した。役人は、賄賂として時計を受けとり、ぼくたち一家が関所を通る許可を出した。

4、二階級特進でA級冒険者だあ

それからも貧しい旅はつづいた。
あまり美しくないジュディという娘と知り合ったけど、ジュディは町で花売りをしているらしい。
ぼくが黙っていると、ジュディもずっと黙っているので、何か話しかけなくてはならない。ぼくらは、お互いの身の上をあまり話したがらない。お互い、惨めな貧乏人なのだ。
「ジュディ、花は売れるかい？」
ぼくが訪ねると、ジュディはことばに詰まっているようだった。ジュディの様子がおかしい。何か、聞いてはいけないことを聞いてしまったかのようだ。
「あのね、チート、花を売っているというより、お客さんはわたしの裸を見たがるの。それで、花を買ってくれたお客さんに内緒で裸を見せるのが、わたしの本当の商売なの」
ぼくは茫然とした。
「いやらしいと思わない？　背徳的よ。きっとわたしは地獄に落ちるんだわ」
「そんなことないよ。神さまは許してくれるよ。でも、もう、裸を見せるのはやめるんだよ、ジュディ」
「あなたなんて、本当につらいことは何も知らないくせに」
ぼくは困ってしまった。ジュディは、体を売っているのだろうか。それは、法律違反だし、背徳的だ。
何より、問題なのは、なぜ、金持ちだけがジュディの裸を見れるんだ。ぼくには花を買うお金がない。
「ジュディ、ぼくにも裸を見せてよ」
思い切っていってみた。そしたら、頬を平手で引っ叩かれた。
「行商人の貧乏人が調子にのるんじゃないわよ」
人生とはこんなものだろうか。社会とはこんなものだろうか。

ぼくは、次の日、新しい街へ旅立ってしまったので、ジュディのその後はわからない。

4、二階級特進でA級冒険者だあ（後書き）

この路線で、どこまで引っ張ろうか悩んだけど、お気に入りが減るようなので、そのうち、ちゃんと魔物と戦います。

5、S級になりました

華の都パパリまで半分も来た頃だろうか。盗賊に襲われた。
売っていた靴を万引きしたのである。
「チート、追え」
父にいわれるまでもなく、ぼくは盗賊の後を走って追いかける。
盗賊は、ぼくより年長の若い男だ。
街角を曲がって、人通りのいないところまで追いかけると、盗賊は態度を豹変した。
ぼくに向かって、ナイフを抜いたのである。
ぼくは素手だ。
「おれさまが靴を盗んだって証拠がどこにあるんだ？」
盗賊は、ナイフをこちらに向けたまま迫ってくる。
ぼくは焦って、とにかく、道端に落ちている石を投げた。
「痛えだろうが。やめろや、クソガキ」
盗賊も石を投げ返してきた。
ぼくの体に石が当たって痛い。あざになったようだ。
重さ二十キロはあると思われる大石を持ち上げて、ぼくは盗賊に迫った。盗賊は走って逃げて行った。
どしん。ぼくは、石を地面に落とす。
逃がしてなるか。
盗賊は、仲間と合流して待っていた。盗賊仲間は六人いる。一人で勝てるわけがない。
「だから、盗んだって証拠はどこにあるんだよ」
「その靴が証拠だ」
「これは最初からおれさまのものだぜ」
くそう。
やられたままでいると思うなよ、盗賊どもが。
ぼくは素手で六人の男に戦いを挑んだ。

でででん、ででん、でんでん、ででん。
何を隠そうぼくの職業は、格闘家だ。行商人は父の職業で、それを手伝っているけど、ぼくは格闘家だったのだ。
「靴を盗んだのは、この右手か」
ぼくが盗賊の腕をねじり上げ、左手で、顔面に殴りを叩きこむ。
「ほわたあ」
「なんだ、こいつ、逆らうつもりだぞ。やっちまえ」
「盗賊どもに名のる名はない」
六人がみんなナイフを抜いた。
「あたたたたたた、ほわたあ」
盗賊たちのナイフをすべて、素手で叩き折り、盗賊たちの足をすべて骨折させ、盗まれた靴をとり返した。
「今までに犯した悪行を悔いるがいい」
「痛え。痛えよう。歩けないじゃないかよお。医者を呼んでくれ」
「運がよければ、死なずにすむだろう」
そして、ぼくは父の店に帰った。

5、S級になりました（後書き）

まあ、ようやく、本番です。

6、天空竜との戦い

華の都パパリに着いた。
ようやく、本格的な商売が始まる。呼び子のぼくも大忙しだ。
働き、働き、ただ、働いた。時計と靴は、順調に売れていく。半月もすれば、完売するだろう。
だが、これでいいのだろうか。ぼくは思い悩む。
ぼくは父に相談してみた。
「ねえ、父さん、ぼく、冒険者ギルドに加盟しようかと思うんだけど」
「冒険者ギルド？　何だ、それは。聞いたこともないぞ」
「だから、魔物を倒す仕事を請け負って、報酬をもらうところだよ。ぼくは冒険者になろうかと思うんだ」
「チート、おまえは疲れているんだ。冒険者ギルドなんてあるわけないだろ」
ぼくは、もちろん、わかっていた。この世に冒険者ギルドなんてものはなくて、そもそも魔物がいないことに。
だいたい、魔物を倒しているだけで日々の生活の糧が稼げるなら苦労はしない。
そんな、都合のよいものは存在しない。

ぼくは失意のままに、夜、テントを抜け出し、王様の宮殿へと向かってみた。夜、散歩に来ている人がけっこういるようだった。
ぼくは、剣を携えた身なりの確かな人物に話しかけてみた。
「その剣は、なんのために抜くんだい？」
それを聞いた剣士は、ぼくと同い年ぐらいの少年だった。
「わかっている。わたしが剣を抜いて人を斬り殺すことなど一生ないだろうことは」
ぼくと少年は、松明の下で、背中合わせにして座った。

「静かだね」
「ああ。派手な事件など、めったになく、あるのは貴族王族の私利私欲にまかせた他国遠征だけだ。そんなものに命を投げ出し、鍛錬した武術の技を披露するのを恥ずかしく思う。わたしは、この剣を何のために使えばいいのだろうか。非力な貧しい民を惨殺するためだろうか。わたしにはわからない。何のために、剣術など、修行して来たのか」
「それでも、うらやましいよ。ぼくは、剣を買うことさえできはしない。剣が買えたら、盗賊にも勝てるし、悪いやつらに負けたりなんかしないのに」
少年は寂しそうにいった。
「わたしも、盗賊や追いはぎから身を守るために剣を帯びているにすぎない。もし、きみが」
少年がぼくの前に立ち、顔に指を指していった。
「もし、きみが剣を手に入れたなら、きっときみは一年とたたないうちに盗賊になり、罪もない農家を襲うだろう。もし、そんなことがないというのなら」
「そんなことはしないよ」
「もし、そんなことがないというのなら、この剣を差し上げよう」
「本当かい！」
「この剣は、魔法の剣だ。きみがまちがったことに剣を使えば、剣はきみ自身を滅ぼす」
少年の目は本気だった。
「剣を受けとります。決して、まちがったことに剣を使わないことを誓います」
ぼくはひざまずいて剣を請うた。
「よし、汝に剣を授けよう。剣の名は、聖剣サンジュバ」
そして、ぼくは剣を手に入れた。

7、決戦魔王城

聖剣を受けとったぼくは、そのあまりの軽さにびっくりした。こんな上質な金属でできた剣を本当にタダでもらっていいのだろうか。

疑問に思ったぼくは少年に聞いてみた。

「きみの名は？」

少年はそれを聞かれるのが嫌だったのがありありとわかる表情を顔に見せた。

「わたしの素性を聞いてどうする？」

「いつか剣をもらったお礼をするために」

「礼などいらない。わたしは、正体を知られると少し都合が悪いのだ」

「それでも、名前だけでも教えてくれよ」

「無理だ」

少年は、顔をうつむけた。

「いつか必ず、この剣の恩を返しにくるよ」

「そろそろ時間だ。わたしはいかなければ、付き人が来る」

「付き人？　きみって、そんなに偉い人なのかい？」

「ああ、どちらかといえばね」

すると、豪華な衣装を身にまとった騎士が二人、やってきた。

「こんなところにおいでしたか。そろそろお城に帰らないと」

付き人の騎士がいう。

「わかっている。行く。それじゃあ。もう会うこともないだろう」

「ご友人ですか」

「そうだ、あったばかりだが」

騎士に連れられて、少年は行かざるを得ない顔をしていた。本当は行きたくないのだろう。あの少年もまた不自由なのだ。

「きみの名は？」

もう一度、声をかけると、少年は答えた。

「わたしはこの国の王子だ」
フラランスの王族の構成など聞いたこともないぼくだが、一度でも出会えたことが幸運であると思わなければならない運命であることを思い知った。
王子と行商人の息子が二人きりで歓談することなど、まずとうてい許されるとは思えない。まして、剣をもらうなど。
今日は運がよかったのだ。お城へ帰らなければならない王子の姿を眺めながら、もらい受けた聖剣サンジュバの価値を思案した。
庶民が剣を手にするなど、とんでもない幸運だ。この剣はあまり目立たないように隠し持つ方がよいだろう。
果たして、ぼくの人生で、剣を使う機会など訪れるのだろうか。
ぼくは思い悩みながら、父と母のもとへ帰っていった。

7、決戦魔王城（後書き）

ちょっと話がご都合主義的かなあ。もっと別の剣の入手展開を考えるべきだった。反省している。

8、神が勝負を挑んできました

聖剣サンジェバを背中にしばりつけて、隠しておくことにした。
ぼくは華の都パパリで行商を手伝いつづけていた。時計と靴を路地で売る。毎日、声をはりあげ、客の呼び込みをする。自分が何の役に立っているのかもわからないむなしい毎日。
幸せはこの世界のどこにあるのだろう。冷たい風が頬をなでる。
ある日、母が突然、病気になった。高熱を出し、テントの中で寝込んでいる。
「大丈夫かい、母さん」
「気にすることはないよ、チート。わたしが死んだら、宝石や衣装を売りなさい。少しは生活の足しになるでしょう」
「そんな。弱気にならないでよ、母さん。大丈夫さ。すぐに病気は治るよ」
「お母さんは、薬草学の知識もあるから自分でわかるんだよ。この病気は治らない。お迎えが来たのさ」
「母さん」
ぼくはどうしたら、いいのかわからなくなった。
父さんが、パパリでも有名な医者の先生に母さんの治療を頼みに行った。その間、ぼくは店の番をしていた。お金の計算がややこしい。まちがえないように必死に、客をさばく。
「アンヌといいます」
老婆が母さんの様子を見に来た。父さんは腰を低くして、老婆を案内している。
老婆に付き従って、一人の少女がやってきた。
少女は無言で、老婆の手伝いをする。
「きみは何者？」
ぼくは少女に聞いた。
「ユユリと申します。アンヌ様の弟子です」

「アンヌ様は医者の先生なのかい？」
「そうです。宮廷で医術を教えておられます」
それは、すごい人が来たものだ。宮廷の医者といったら、王様の病気の治療にあたったりする人なわけだろう。母さんの病気も治るかもしれない。
ぼくはそんなことを期待していたが、アンヌ様は、母さんの容体を見ると、粉薬を一袋、ぼくらに売りつけた。
「とても重い病です。この病にかかって治った者はおりません」
アンヌ様はいう。
父さんの顔が青ざめていた。
アンヌ様が帰った後、父さんは泣いていた。
「チート、ちょっとこっちに来なさい」
「どうしたの、父さん」
ぼくは、父さんのただならぬ様子にびくびくして、前に出ていった。
「破産だ」
父さんはいった。
「どういうこと？　父さん」
「母さんの治療代を払ったら、我が家に財産は残らない。もう生活していくお金はない。我が一家は破産だ。母さんの病は治らないし、父さんとおまえものたれ死ぬだろう」
「な！　だって、一回診察を受けただけじゃないか？」
「宮廷の医者だ。父さんたちでは診察代を払うことはできないんだよ。父さんはそれでも母さんの病を治したかった」
「そんな。父さん、嘘だろ」
「チート。もう店の手伝いはしなくていい。どこか、この町で別の仕事を探してきなさい。父さんは母さんの容体をずっと見ている」
ぼくは、涙を流して、夜の町へ走り出した。

9、神より強きもの

ぼくは夜のパパリを走った。酒場で歓声が聞こえる。裕福な民が、飲めや歌えやの大宴会を開いているのだ。

背中の聖剣の感触をぼくは思い出す。

もし、あの酒場を襲って、金品を巻き上げれば、我が家は破産しなくてすむんじゃないか？

そんな思いに気をとられる。

迷う。

お金さえ、あれば。

それには、多少の甘い誘惑であった。

王子のことばが頭をよぎる。

もし、きみが剣を手に入れたなら、きっときみは一年とたたないうちに盗賊になり、罪もない農家を襲うだろう。

まさに、それこそがぼくの目指すべき道ではないのか。

あの、太った酔っ払いたちを皆殺しにすれば。剣で脅して、有り金を巻き上げれば。そうすれば、きっとぼくは救われる。

思い切って、酒場に足を踏み込んだそこに、ぼくを待ちうけていたのは。

「ちょっと、いいお兄さんじゃない」

酔っぱらったお姉さんに抱きつかれた。

「ちょっと困りますよ、お姉さん。ぼくは今、人生の岐路に立っているんです」

「あら、何かたいへんそうね。お姉さんが相談にのるわあ」

「それは、もし、命がほしければ、有り金全部置いて」

「あらあ、お兄さん、気が立ってるのねえ。お姉さんが気持よくしてあげようかあ」

「ちょっと、本当に困ります。ぼくは今、とりこんでいるんです」

「わかるわあ。ここが闘士にみなぎっているもの」

お姉さんが、ぼくの股間に手をあててくる。緊張に縮こまっていたぼくの股間は、きれいな魅惑的なお姉さんの頬ずりに負けて、ぐんぐん大きくなる。

いけない。ぼくはこんなことをしている場合じゃないのだ。

このお姉さんを殺すことはできない。

このお姉さんからお金をまきあげることはできない。

このお姉さんの前で盗賊の真似ごとを見せるわけにはいかない。

このお姉さんの前で、恥をさらすわけにはいかない。

ぼくは、この酒場を襲ってはいけない。

ぼくは、顔を引き締め、お姉さんをぐいっと引き離し、面と向かっていった。

「お姉さん。お姉さんはぼくの魂の救済者です。お姉さんがいなければ、ぼくは人生の道を踏み外しているところでした。ぼくはお姉さんに忠誠を誓います。ぜひ、お姉さんのお名前を聞かせてください」

礼儀正しく、堅苦しくふるまうぼくにお姉さんは調子を狂わせたようだが、お姉さんは、ぼくに体を動かされたことが気持ちいいらしく、酔っぱらった酒臭いことばで、答えた。

「あたしはマリアよ。お兄さんの名前も教えて」

「ぼくはチートといいます。マリアさん、あなたはぼくの魂の救済者です。今日、出会った御恩は一生忘れません。その恩に報いるように、ぼくは清く正しく生きていきます。それでは」

もう、お姉さんの顔を見る勇気も残っていなかった。

盗賊になってやろうと思ったぼくは、こうして、パパリの酒場を飛び出したのである。

9、神より強きもの（後書き）

感想とかほしいです。

10、闘神と戦うことになりました

ぼくは知らず知らずのうちに、人気のない場所を求めて走りつづけ、いつの間にか、気づくと町外れの古い塔へとやってきていた。
なんだろう、この塔。違和感がする。
誰も住んでいないなら、これからここで雨露を防ぐことぐらいはできるだろうか。
そんなことを思って、ぼくは塔の入口で立ち止った。
塔は、正面の入口の奥に礼拝堂があり、無人の祭壇が祭ってある。
塔の壁伝いに、階段がつくってあり、レンガ造りのこの塔の屋上へと道が続いているようだ。
「誰かいませんか」
ぼくが礼拝堂に入っていくと、中で、うずくまって泣いている黒い服の女の子がいた。
「えーん、えーん、どうしよう、どうしよう。困ったわたしを助けてくれる人はいないかしら」
妙に芝居がかっているが、本気で泣いているらしき女の子にぼくは声をかけた。
「大丈夫かい。よければ、力になるよ」
女の子が長い黒い服を揺らしながら、起き上った。
「本当？　わたしの悩みを聞いてくれる？」
かわいい。ぼくは胸がきゅんとした。
「ああ、きみの悩みを聞いてあげるよ。どうしたんだ？」
女の子は、ひらひらと踊る。舞う。ぼくの周りをまわるように歩きながら、踊る。
「わたしは貧しい行商人の娘。母親が病気になって、お父さんが宮廷の医者に治療を頼んだの」
ぼくは、妖かしに化かされている気がしてきた。この女の子は何者だ。

「それはぼくと同じ……」
「それでね、それでね、ソニアの父さんは高い治療費が払えなくて破産しちゃったの」
女の子がゆらゆらと舞う。
何だ？　気分がおかしい。
女の子は、礼拝堂を出て、塔の壁伝いの階段を登っていく。
ぼくはそれにふらふらとついていく。
「きみはソニアというのか。なぜ、それを知っている。ぼくを待ち伏せていたのか？」
ソニアは階段を後ろ向きに登って行きながら、ひらひらと舞う。
「あはは、あはは、それでね、わたしは、いっそ金品を巻き上げてやろうかと、酒場に入っていったのよ」
「それ以上、いうな！」
ぼくは叫んだ。ソニアは舞う。
気がつくと、塔の屋上にやってきていた。大きな鏡がそこにはあった。
「いっそ、人を殺して生きていこうかとわたしは思ったのよ」
「黙れ」
「あはははは」
鏡の前を横切るソニア。
鏡にぼくの姿が映っている。
すると、鏡の中に、山羊の角を生やした悪魔が姿を現した。
「人を殺して生きていくというのなら、このわしの贄となって、この町を滅ぼしてしまおうではないか」
鏡の中の悪魔がぼくに話しかけた。
ぼくは後ろを向く。
何もいない。
悪魔は鏡の中にいる。
「人を殺して生きていくというのなら、わしと腸の食い合いでもしようではないか」

鏡の中から悪魔が出てきた。
今、この時のために、ぼくはこれを受けとったのだろう。決して酒場で金品を奪うためではなく。
ぼくは、背中から剣を降ろして、柄を手にとった。
剣を使っても許される場面がやってきたのだ。

１１、次は破壊神の登場だあ

ぼくは、聖剣サンジュバをすらりと抜いた。きれいに、文字通りすらりという音を立てて、剣は抜けた。

「わはははは、わしに勝てると思っているのか、若造」

悪魔が真正面から突っ込んでくる。

ぼくは、頭を働かせる。この悪魔は絶対に、真正面から素直に突撃してきたりはしない。絶対に、直前で方向を変えるはず。

ぼくは、無闇に剣を突き出さず、ぐっと構える。

悪魔は、予想通り、目の前でひらりと宙に跳ね、ぼくの左の腹を殴ろうとしてくる。

悪魔は素早い。

ぼくは待ちかまえていた通り、悪魔の腕に目がけて剣を振り下ろす。

ざくっ。

それは、恐ろしく切れ味が鋭かった。聖剣は、まるで空気を斬るように軽く、悪魔の腕に突き刺さった。

「ぐぬぬ」

悪魔の右手が落ちる。

ぼくの慎重な策が成功し、悪魔の右手を斬り落とした。

「逃げないのだな、お主」

悪魔が笑う。

「夜の町に住みつき、人を襲う悪魔を見逃して逃げるわけにはいかない」

「ははははは、わしがその気になったら、お主など、ひと呑みにしてしまうのにか」

悪魔は笑う。

ソニアも笑う。

「あはははは、おかしな男の子。自分の身の程も知らずに」

ひらひらとソニアが舞う。
負けるわけにはいかない。
悪魔に対して、じりじりと足を近づけるぼく。
「そりゃ」
悪魔が左手で殴ろうとしてくる。ぼくは、左手に聖剣を向ける。
しかし、跳ねるように飛んだ悪魔が、逆方向から蹴ってきた。
べきっ。ぼくは塔の屋上の上で吹っ飛んだ。床に落ちて転がる。
踏みとどまるんだ。
ぼくは手と足に力を入れる。屋上から落ちたら、死んでしまう。
痛い。肋骨が二、三本、折れた感じだ。ずきずき痛む。
だが、痛みを気にしていては死んでしまう。悪魔に注意を向けるんだ。
ぼくは悪魔を見る。悪魔は、翼で軽く浮き、低空飛行で突っ込んできた。
腕が重い。
しかし、腕を動かさなければ。
悪魔の動きに遅れをとれば、殺される。死んだら、死んだら。
ぼくが死んだら、どうなるんだ？
何も困らないじゃないか。
「わはははっ」
悪魔の蹴りを両腕で受け止める。剣はかわされた。
腕が痛い。
「そりゃあ」
ぼくは叫んで宙に浮く悪魔に剣を突き立てる。
悪魔は軽く浮いてかわす。
「わしの左手を斬り落としたことは褒めてやろう。お主はたいした人間だ。しかし、わしに本気で勝てると思っているのか？　怖くないのか？」
悪魔に話しかけられて、ぼくは急に怖くなった。なぜ、ぼくは戦っている。

逃げなきゃ。
ダメだ。逃げちゃダメだ。
「この聖剣をくれた恩人のため。魂の救済者のため。ぼくはきみを倒す」
「ほほう、命をかける偶像をもっていたか。ただの凡暗ではないわ、このガキ」
悪魔がぼくを褒める。
「ええ、この男の子、見込みあるの？」
ソニアが満面の笑みを浮かべる。
「ある。聖なるものにも、邪なるものにも、好かれるであろう」
ぼくは、地面に降りた悪魔にじりじりと間合いをとって、詰め寄る。
「ソニア、きみはこの悪魔の何だ？」
ぼくは悪魔をにらみながら叫んだ。
「わたしは、魔女よ。この悪魔の祭壇で、生贄を待っているの」
「この悪魔を殺したら、ぼくの召使になるか、ソニア」
「あなたが勝ったら、あなたのものになってもいいわ。この悪魔が死んだら、わたしは行くところがないもの」
ぼくは、悪魔に目がけて突っ込んだ。
悪魔がソニアをつかんで、ぼくに向かって放り投げる。
ソニアがぼくにぶつかる。ぼくは後ろに吹っ飛ぶ。
悪魔がぼくの喉笛に噛みつこうとする。
ぎりぎりで、ぼくは聖剣を悪魔の口に突き立てる。
悪魔の口が裂けた。
ぼくは、全力で、剣を前に突き出す。
悪魔の頭を聖剣が突き抜ける。
「ああ、悪魔が本当に負けた」
ソニアが目を点にして驚く。
「なぜ」
ソニアの問いかけに、悪魔の霊が答えた。

「この男は、ソニア、汝を決して斬ろうとはしなかったのだ。それだけだ。それをわしは読みまちがえた」
悪魔は、灰になって消えた。
後には、聖剣を握りしめたぼくだけが残った。
動けない。全身が痛くて動けない。
「あなたの勝ちよ」
ソニアが顔を赤くして立っている。
ぼくは、
「少し待っていてくれ」
とうめいて、うずくまりつづけた。

１２、神々の軍を一人敵にまわし（前書き）

この章は、読者の趣味嗜好によっては、ドンざめかもしれません。
作者、ＶＲＭＭＯの雰囲気がわかってませんので。

12、神々の軍を一人敵にまわし

全身の骨にひびが入っている感じだった。
しばらくすると高熱も出てきた。
塔の一階の礼拝堂で、ソニアが痛みにうめいているおれを白々しく見ている。
「近づくなよ。きみは聖剣を盗むかもしれないからな」
「まあ、心配性なご主人さまね」
ぼくとソニアはそんな微妙な距離感をもった関係だったのだが、そこに新たな介入者が登場した。
彼女は、空中から突然、現れた。
＜ＶＲＭＭＯ＞の文字を砂が空中に描いた。
勝利は中心記憶回路を覚えている。
その文字が何を意味するのかはわからない。
空中に現れた少女は、白と青の色の対比の激しい派手な衣装を身に着けていた。
「おはようございます。チート・ハーレムさま。わたし、メンテナンスＮＰＣのサブリナと申します。異世界での生活はいかがでしょうか」
ぼくとソニアは戸惑った。
彼女が何をいっているのかわからない。
すごくかわいい女の子なのだが、いってることがまったく理解できない。
「サブリナ、きみはいったい何をいってるんだ？」
「わたしは、チート・ハーレムさまがＶＲＭＭＯの世界に入ったまま、記憶喪失になった可能性を考慮して、派遣されてきたのであります。チート・ハーレムさまは、異世界で、裕福な家庭をもつ男子中学生でございます」
ぼくはソニアに対して首を振った。

まったくいっている意味がわからない。
「サブリナ、きみはどこかおかしいんだよ。正気が戻るまで、きみもぼくが面倒を見るから、ぼくの召使になるといい」
サブリナは、大袈裟な泣き顔をした。巨大な涙がこぼれ出ている。
「ええ、ぐすん。チート・ハーレムさまを正気に戻すのがわたしの役目なのです。チート・ハーレムさまが正気に戻るまで、影ながらお供させていただきます」
そして、サブリナは空中で消えた。
「サブリナは、いつでも、待機していますからお気にせずに。プレイヤーの邪魔はしないプログラムが組まれていますので」
「サブリナ、きみが何をいっているのか、まったくわからないよ。サブリナは、疲れているんだ。ぐっすり休んだ方がいい」
サブリナがまた姿を現していった。
「そういえば、お仕事を忘れていました。イベントをクリアしたチート・ハーレムさまに報酬として、戦いの怪我を治させてもらいます。それでは、ごゆっくりお楽しみください」
サブリナはそういって姿を消した。
ぼくの体の痛みは、一日も寝込んでいると治った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1570y/

異世界でＶＲＭＭＯチートハーレム

2011年11月3日23時39分発行